

第7章 最後に

第7章 最後に

令和元年10月31日の首里城火災によって、私たちは、首里城、とりわけ正殿は火災に弱く、消火も困難であるということ、そして、再築される首里城においても、その性格は基本的に同じであり、火災のリスクがあるということを知った。

このような首里城を、どうすれば火災から守り、数百年先までも遺すことができるのか、非常に難しい問題である。

この難しい問題を解決するために、私たちは何をなすべきかを考えなければならないが、すべては、私たちが、首里城には今後も火災による焼失リスクがあるということを理解し、受け止めることから始まる。

建築基準法や消防法等による規制を満たす設備があったとしても、それだけでは首里城を火災から守るのに十分とはいえず、首里城を守る人々の日々の管理体制の工夫や充実した訓練、消防との連携が必要不可欠である。首里城火災を踏まえ、今後、防災・防犯設備が強化されることになるであろうが、それで安心せず、常に改善・改良する努力を続けることを忘れてはならない。そして、さらに、これらがうまく機能しなかった場合あるいは想定していない事態が生じた場合についても、消火が可能となるような設備的工夫をする必要があるだろう。ただ、このような設備にしても有効に活用するのは人間であり、訓練である。そのようなことを可能とするような組織や体制を構築し、火災に対して、二重三重に備えをすることが必要である。

最終的に、この問題の解決は、直接首里城の防災管理に関わる人たちだけでなく、地域、さらには県民ひとりひとりの首里城を未来に遺したいという熱意にかかっているといえるだろう。

火災から首里城を守るのは、人でしかない。直接、首里城の防災管理にあたる人材の訓練や消防との連携はもちろんのことであるが、それだけでは足りない。地域の協力、さらには県民ひとりひとりが首里城を将来へ引き継いでいくという強い決意があってこそ首里城を守ることができると考える。